

アランの『幸福論』の現代的意義について

On the Modern Significance in Alain's *Eudaemonics*

笠井 哲

福島工業高等専門学校一般教科

KASAI Akira

National Institute of Technology, Fukushima College, Department of General Education

(2021年8月10日受理)

The purpose of this paper is to consider the modern significance in Alain's *Eudaemonics*. Alain thought a cause of the misfortune to lie in passions. The person thinking that oneself is unhappy is apt to attribute an excuse to another person. The courtesy is necessary to bring about happiness. The modern significance in Alain's *Eudaemonics* is to have been based on everyday life.

Key words: Alain, *Eudaemonics*, misfortune, passions, happiness

「笑うのは幸福だからではない。むしろ笑っているから幸福なのだ」¹⁾。

1. はじめに — アランの生涯とプロポ —

上の引用は、アランの『幸福論』77「友情」における有名な言葉である。本稿の目的は、彼の『幸福論』の現代的意義について考察することである。

世界には、俗に「三大幸福論」と呼ばれる人間の幸福について論じた名著がある。スイスのカール・ヒルティの幸福論（1891年）、イギリスのバートランド・ラッセルの幸福論（1930年）、そして本稿が取り上げるフランスのアランの幸福論（1925年）である。中でも、従来最も知名度が高く最も愛されてきた論考が、アランの幸福論だといわれている。

というのも、ヒルティの幸福論は、敬虔なキリスト教の信仰と古代ギリシアの哲学思想に基づいた地域限定性が否めないし、ラッセルは、学術的な側面が否めないゆえ、両者ともに、大衆にとって共感性が乏しい側面がある。

その点で、アランの幸福論は、難解な表現や宗教や哲学の知識がない人でも理解できるため、時代を超えて愛され続けている普遍性がより多いと評価できる。

アランはペンネームであり、本名のエミール・オーギュスト・シャルティエとしては、1868年にフランス北部のノルマンディー地方に生まれ、1951年に83歳で没している。24歳で高等師範学校を卒業し、哲学の教師にな

ったアランは、その後、フランス各地の高校で教鞭を執り続けた。

32歳（1900年）からは、「ロリアン新聞」にアランというペンネームで寄稿するようになり、知識人が民衆のために勉強会を行う啓蒙活動に参加し、講演や論争にも関わった経歴がある。

41歳（1909年）の時に、パリの名門アンリ四世校に移り、引退するまでそこで教鞭を執った。「永遠の高校教師」と呼び称えられたアランは生涯、大学の教員にはならなかった。そのため、パリ大学哲学科の学生たちが、アンリ四世校の彼の講義に通っていたという逆転現象が起きていた。

次に、アランの代名詞といえる「プロポ」という表現形式について俯瞰を試みる。アランは19世紀末から20世紀初頭としては珍しい、ジャーナリズムと深く結びついた哲学者であった。

1903年、「ルーアン新聞」に「プロポ・ド・ディマンシュ」という記事を連載し始めた。「プロポ」は語録、「ディマンシュ」は日曜なので、和訳すれば「日曜雑話」という意味となる。

プロポは、便箋二枚分の文章量で、現在のコラムにあたるものである。アランは生涯で膨大な数のプロポを執筆し、総数五千編超だともいわれている。これらのプロポは、年代順に本として出版するかたわら、出版される際にテーマ別に集め直された。例を挙げれば、『宗教についてのプロポ』、『美学についてのプロポ』、『経済

についてのプロポ』、『教育についてのプロポ』などが実際に出版されている。

その中の一つが『幸福についてのプロポ』で、これが後に『幸福論』と呼ばれるようになった。1928年の『幸福論』第二版には、93編のプロポが収録されている。並べ方は、時系列順ではなく、1905年から1926年までの、21年間にかけて書かれたものから、「幸福」をテーマにしたものが相関性の高い順にピックアップされて並んでいる²⁾。

概要は、不幸と思ひこむ原因となる心身の関係性から始まり、自分自身とのつきあい方、対人関係、幸福になるための心がけなどが言及されて論じられている。次いで、『幸福論』本編の内容に入っていく。

2. 不幸の原因としての情念

そもそもアランは、「幸福」をどのように考えていたのだろうか。彼の主軸となるのは幸福を追求することは、人間の普遍的な欲求である。進んで不幸になろうという人などは、誰もいないという主張である。

哲学もまた古代ギリシア以来、様々な哲学者たちが「幸福とは何か」を絶えず探究してきた。しかし、そこには幸福それ自体を、「徳」とは見なさない立場があった。

苦しんでいる人、悲しんでいる人、後悔している人から、何か高尚な思想が生まれてくる。すなわちそういう人こそが有徳であり、美德を兼ね備えているという発想があった。これにはじめて異を唱えたのは、17世紀の哲学者スピノザ(1632~1677)である。彼は、『エチカ』第5部「知性の能力あるいは人間の自由について」で、次のように述べている。

「至福は徳の報酬ではなくて徳それ自身である。そして我々は快楽を抑制するがゆえに至福を享受するのではなくて、反対に、至福を享受するがゆえに快楽を抑制するのである」³⁾。

つまり、快楽を抑制したから人間は幸福になるのではなく、幸福であるから快楽を抑制することができるというのである。アランもスピノザを継承している。『幸福論』の89「幸福は美德である」では、次のように述べられている。

「だから、私は、自分個人の幸福は美德に反するものどころか、むしろ美德そのものだと考えている。その美しい言葉が示すように、美德それ自体が徳なのである」⁴⁾。

スピノザとアランは、この点では合致しているが、スピノザもアランも、古くからある幸福と美德に関する通

念を全否定はしていない。アランは、あくまで自分が幸福になることが、他人にとっても幸福なのだという証左のために、『幸福論』90「幸福は寛大である」で、次のように論述している。

「たしかに、私たちは他者の幸福を考えなくてはいけない。しかし、愛する人に贈ることのできるもっとも素敵なことは、自己を幸福にすることなのである。そのことは、まだあまり言われていないことだ」⁵⁾。

アランのこの主張には、自己のことを不幸だと思っている人が、その不変性ゆえにとどまることを否定する意図が含まれている。『幸福論』には、この不幸から逃れられないと思ひこんでいるだと数多くの人々が登場する。『幸福論』の冒頭「モール・ランブラン夫人への献辞」において、次のように述べられている。

「私がいうのは、深刻な理由もないのに不幸な人達のことだ。本物の不幸について、私は何も書いていない」⁶⁾。

『幸福論』でアランが言及しているのは、「本物の不幸」ではなく、「不幸だと思っている人」なのである。では、なぜ人は自己を不幸だと思っているのだろうか。「自己を不幸だと思っている」人々は、「情念」によって支配されている。意識してもしなくとも、私たちは皆、情念に支配されている。アランは、この情念こそ人が「自分を不幸だと思う」ことの根元だと論じている。

では、「自己を不幸だと思っている人」の抱えている問題は、「本物の不幸」よりも深刻ではないのだろうか。『幸福論』に登場するのは、皆心身の苦しみや不機嫌や憂鬱を抱えた、不幸と見なされたり、自己を不幸だと思っていたりする人たちである。

しかし、アランは『幸福論』92「幸福にする義務」で、次のように論じている。

「不幸になったり、不満を抱いたりするのは別に難しいことではない。じっと座っていればいいだけの話だ。人が楽しませてくれるのを、ただ待っている王子と同じだ」⁷⁾。

すなわち、「ただ待つだけなら不幸しかない」という。この王子は一体、何を待っているのだろうか。「人が楽しませてくれること」、「幸福」を待っている。自分からは動かないがために不幸なのである。『幸福論』93「幸福への誓い」では、次のように述べられている。

「万事、成り行き任せにしていると、気分が暗くなってしまう。しかし、それだけでは言い足りない。なぜなら、その寂しさや苛立ちは、たちまち怒りになってしまうからだ」⁸⁾。

自己を不幸であると思うとき、人は自らの不幸を他人に押しつけてしまう。こうした心性は、社会運動を生み出す力にもなる一方、責任転嫁にもなり得る。

ここでアランが主張したいのは、「困難も不幸も本当の原因がわかれば、対処法はそれほど難しくはない」ということである。しかし、人は原因ではなく、結果として表れる苦しみの方しか見ようとしなため、不幸だと感じてしまう。このことを端的に表しているエピソードが、『幸福論』の1「名馬ブケファロス」の中の一節に明記されている。

「赤ちゃんが泣きやまず、どんなにあやしてもぜんぜんらちがあかないとき、乳母はその子の性格や好き嫌いについて、あれこれ思いを巡らすものである。ついには、親の遺伝だと考え出す始末だ。泣きわめく姿を見て、父親そっくりだと言い出す。

こうした思いに終止符を打つのは、乳母がその子の産着にピンがささっているのを見つけた瞬間だ。赤ん坊が泣いていたほんとうの原因は、ピンを嫌がっていたからだ。」⁹⁾

赤ちゃんが泣いている本当の原因は、産着の中にピンが挟まっていたからであった。つまり、赤ちゃんは父親譲りの癩癩もちでぐずっていたのではなく、産着の中にピンが挟まっていたというきわめて単純な理由から泣いていたというのである。アランは、この話のすぐ後に、古代ギリシアの英雄のエピソードを続けている。

「名馬ブケファロスが、若きころのアレクサンドロス大王に献上された。そのとき、暴れ馬のブケファロスを手なずけられる調教師はそこにはいなかった。普通の人なら、『なんと性質の悪い馬なんだ』といったのしるだけだろう。ところがアレクサンドロス大王はこの馬が暴れる原因を突き止めたのだ。いったい、この馬にとってのピンとは何だったのだろうか？

王子が気づいたのは、ブケファロスが自分の影に怯えていたということだった。自分の影が飛び跳ねる姿に怯えていたのである。そこで、ブケファロスの鼻面を太陽のほうに向けさせて落ち着かせ、影を見せないようにした。すると馬は安心し、やがて疲れ、ぐったりしてきた」¹⁰⁾

誰もが、「荒馬だ」とブケファロスの性質をきめてかかっていたのに対し、アレクサンドロス王はブケファロスを冷静に観察し、即時に暴れている原因を突き止めた。ここからアランは、恐怖や不安を感じた際、己の思いこみに身を任せるのではなく、それらを引き起こした「ピン」つまり原因を探せ、というのである。さもないれば、

手に負えないほどの情念にとらわれて、真の原因にますます気づかなくなる。幸福になるための第一歩は、不幸や不満の原因を探ることにある。

「ところで、人がいらだったり、不機嫌になったりするの、あまりに長い間立ちっぱなしだったことが原因なのかもしれない。そんなときは、理屈をこねたりせず、椅子を差し出して座るように勧めればいいだけである」¹¹⁾。

自分の情念にとらわれて、身心が硬直してしまうことを、アランは「不幸」と見なした。そして、こうした心のこわばりを解きほぐす「身体的な運動」が、実は思わぬ処方箋にもなると考えたのである。アランは、『幸福論』の16「態度」において、次のように述べている。

「心にかかわる病にも、身体に関する病の初期症状にも、筋肉の屈伸と体操が必要である」¹²⁾。

アランは、身体が正しい方向に動き、能動的・活動的になっていくと、精神もプラスに傾いて、能動的・活動的になっていくと考えたのであった。

3. 幸福を生み出す行動

アランは、自分のことを不幸だと思ってしまうことの根本に、「情念」があるという。彼にとって、情念という概念は重要である。情念について知るために、情念を巡る考察の系譜を提示しておこう。

まず、ヘレニズム期からローマ時代に広範な影響力をもったストア学派である。アランは『幸福論』の53「短剣の舞」で、次のように述べている。

「誰もが、ストア学派の強い精神力についてはご存知のことと思う。彼らは憎悪、嫉妬、恐怖、失望といった情念を深く考察し、優れた御者が馬を手なづけるように、情念にしっかり手綱を締めることができた」¹³⁾。

ストア学派は、情念を綿密に捕捉しており、負の情念から脱却することで平安な状態になると考えていた。しかし、それはアランの与するところではなかったのである。

情念を論じた哲学者たちの中で、アランが高く評価していたのは、デカルト（1596～1650）である。デカルトは、1650年にスウェーデンで亡くなる前年に、『情念論』という著作を上梓した。アランは『幸福論』で、デカルトの『情念論』を引用することによって、広く世に伝えたのであった。

さて、情念という心の作用は、よからぬ「想像力」を生み出す。アランは、『幸福論』の9「精神の病」の中で、次のように述べている。

「想像というものは、古代中国の処刑人より非情である。想像力は恐怖を調理し、私たちにじっくり味わわせる」¹⁴⁾。

つまり、想像力によって恐怖の量が変わってくる。あれこれ想像することで、不安や恐怖が増していく。『幸福論』では、想像力がもたらす負の結果について、寓意的に援用している。例えば人間は、生ある限り、死への感情から免れることはできない。アランは、この情念について、『幸福論』の15「死について」で、こう論じている。

「まったくの健康な人が、死について考えるのは滑稽に見える。死ぬ危険など何もないのだから。ところが、死をふと思ってまったくとりとめもなく、取り乱して収拾がつかなくなると、むき出しの情念が牙をむく」¹⁵⁾。

心配しても無駄なことを、杞憂なまでに妄想する現象をアランは、「むき出しの情念」と定義した。また、『幸福論』の3「悲しみのマリー」でも、類似の議論を試みている。

「お世辞を言われればからかわれたと思い、親切にされたら侮辱されたととってしまう。誰かが秘密を打ち明けようものなら、何かよからぬ企みがあると思う始末。これほどのマイナス思考につける薬はない」¹⁶⁾。

他人の言動の裏に潜む意味を考えたところで、真相は本人にしかわからない。自己のみの想像では不確定でしかないものに配慮してしまう現象を、アランは「愚かなこと」と論じているのである。

では、この問題を解消するキーワードとして、アランは「行動」に一つの解を見出している。

『幸福論』の17「体操」に出て来るピアニストの例が、それを示唆している。失敗を恐れ、舞台に立つことを酷く怖がっていたピアニストは、演奏し始めるやいなや、その恐怖を克服し、平静な心を取り戻した。アランは、ピアニストの恐怖を追い払ってしまったのは、彼自身の指の運びであった、と解説している。

人が情念から解放されるのは、思考の働きによってではない。そうなるのは、体の運動によってである。『幸福論』の79「儀式」で、次のように論述している。

「人前で歌ったり弁舌をふるったりするときも、律動的な動きが筋肉に伝えることができれば、人の気持ちも落ち着いてくる」¹⁷⁾。

次に、「意志」、「努力」、「行動」の考察に移ることにしたい。「意志」については、『幸福論』の最終章93「幸福への誓い」の冒頭において、次のように述べられている。

「悲観主義は情念から生まれ、楽観主義は意志から生まれてくる」¹⁸⁾。

「楽観主義」は、アラン哲学においても根幹をなす大切な思想の一つであり、意志の力で楽観主義になることが、幸福をつくり上げる第一歩になる。一方、「悲観主義」においては、意志や努力は不要だと定義づけている。アランは、『幸福論』90「幸福は寛大である」において、「悲しみ」という言葉でそれを表現している。

「私たちは幸せになる意欲を燃やし、実際に本気で取り組んでいかななくてはならない。公平な見物者の立場のまま、ただ扉を開いて幸せが来るのをただ待っているだけでは、訪れてくるのは悲しみだけだ」¹⁹⁾。

また、アランは『幸福論』の48「幸せな農民」で、次のように論じている。

「仕事は最高のものにも、最悪のものにもなりえる。つまり最高の仕事とは自分の意志で行える仕事であり、最低の仕事とは隷属的な仕事だ。私がおっとも自由を尊重してもらえると考えるのは、自分の知識と経験を頼りに、自分で考えて決断できる仕事である」²⁰⁾。

自分の意志の力によって、行動を支配することの重要性を、アランは述べている。農民には、やらなければならないことが次から次へと出てくるが、一つの収穫が次の収穫の約束となる。これこそ、幸福の原初の形なのである。

アランは、『幸福論』の47「アリストテレス」の中で、古代ギリシアの哲学者アリストテレスの残した言葉について述べている。アリストテレスは、「真の音楽家は音楽を楽しめる人間であり、真の政治家は政治を楽しめる人間である」²¹⁾ といったと。

しかし中には、はじめからその楽しさを推測できないものもある。アランは、バルザックの小説を例に、『幸福論』87「勝利」で、「バルザックをしっかりと理解するには勇気が必要となる。最初のうちは読んででも退屈してしまうからだ」といい、次のように述べる。

「本からどんな楽しみが生まれるのか、最初から分かる人など誰もいない。読書家でさえ驚いてしまうほど、楽しみは予測できないものなのだ。学問も外から見ていてはおもしろくもなんともない。私たちは学問の扉に入っていかなくてはいけない。最初は自分から強制的に学ぶ必要があり、その後も困難はつきものだ」²²⁾。

このように、意志とともに行動を起こすことが、幸福にとって最も重要なことで、幸福は行動の中にしかない、とアランは考えた。ただし、幸福は必ずしも困難なものではない。そもそも「幸福」は、想像しえないものであ

るのに加えて、力んで求めるものではなく、日々の振る舞いで少しずつ積み重ねていくものである。

したがって、『幸福論』の69「結び目をほぐす」で、次のように述べられている。

「皆がやらなくてはいけないのは、この筋肉の束をほぐすことである。それは簡単にできる仕事ではない。誰もが知っているとおりに、最初にその障害となるのが怒りと失望である。そこを退治するのに必要なのが、信念、希望、微笑み、そして行動である」²³⁾。

以上を踏まえ、私たちは自分の幸福を行動によって生み出していかなければならないのである。こうした作業を経て手に入れた幸福こそ価値があり、それは決して私たちに裏切らないのは、『幸福論』の47「アリストテレス」においても明らかである。

「幸福はつねに私たちから逃げていく、と言われている。与えられた幸せなら、それは否定できない。それは実際には幸福とは言えないからだ。しかし自分の力でつくる幸福は、けっして人を裏切らない」²⁴⁾。

能動的に体を動かそうとする「意志」、困難があろうとも継続する「努力」、そして実際に「行動」することこそが幸福になるために必要なことだ、とアランは考えた。こうして情念を制御することは、自分を知り、さらには自分をつくり上げることにつながる。モーロワ(1885～1967)は、アランの教え子であり生涯の弟子であった。モーロワは、こうした思想から彼を、現代における「ソクラテス」²⁵⁾と評したのであった。

とはいえ、自己の形成は自分一人完結せず、私たちが社会の中で生きている以上、他者と連携した自己形成となるところに必要とされるのが、「礼儀」と呼ばれるものである。次に、「礼儀」に関連して「上機嫌」でいることの大切さを考察してみよう。

4. 礼儀を身につける — 上機嫌 —

情念は、自分そのものであると同時に、自分には制御できないし、自分よりも強い敵でもある。私たちは、情念によって自分を攻撃すると同時に、他人に対しても悪いイメージを投影し攻撃してしまうのである。アランは、『幸福論』の20「不機嫌」において、次のように論じている。

「激怒している姿が端的に分かる動作、それはからだを掻きむしる姿ではないだろうか。それは自分の苦しみを自分で選び取る動作である。自分で自分に復讐する動作である。まずこれをやってみるのは子どもである。泣きわめくから、よけいに激しく泣き散らす。周りに当た

り散らすことでいっそう苛立ち、なだめられても絶対許すものかと思いつつも、自分を慰めている。つまり、ずねているのだ。好きな人を苦しめることでますます自分も傷つけられる。自分を懲らしめるために好きな人を傷つける」²⁶⁾。

苦痛を苦痛で紛らわそうとする悪循環によって、情念にとらわれた人が自己を攻撃するつもりで、結局は他者を攻撃しているのである。

些細なことでも、他人の情念の暴走が自分に飛び火したとき、良い気になる者は存在しない。苛立つ人を見て自分も苛立ち、不機嫌な人からは不機嫌をもらい受ける。アランは、それを「感染」と呼んだ。

「他人の人生にも迷惑が及んでいく。レストランに入り、隣の客やメニューやウェーターに敵意を投げかける。これで万事休すだ。不機嫌がひとりの人間から別の人間へと感染していく。混乱が発生する。おそらくコップが割れてしまうだろう。その夜、ウェーターは、妻にあたって殴りつける。このような不機嫌になる状況を理解しておかねばならない」²⁷⁾。

ここでアランは興味深い指摘をしている。一般にエゴイストというと、利己主義者を想定しがちだが、彼はこうした「感染」を含む共同体に参加し話し合う者たちもまた「エゴイスト」とであると定義した。つまり、ある人の恐怖や苛立ちは、無数の不平を煽り、その連鎖に荷担することで、他人を顧慮することができない。私たちは社会をなして生きているので、他人との折衝なしに生活することはできない。ということは、必然的に誰でもこの連鎖に巻き込まれるし、「エゴイスト」にもなりうる。

意外なことに、一般に善行とされる「同情」や「哀れみ」も、こうした感染の一種であり、哀れみを「人類の災禍の一つ」と重々しく指摘している。これは『幸福論』の58「哀れみについて」で、アランは以下のように論じている。

「親切には、人生を暗くしてしまう性質のものがある。それは悲しみのことに他ならないが、一般に哀れみと呼ばれている。それは人類の禍のひとつだ。実際にそれがどういふものか知りたければ、思いやりのある女性が、結核の疑いのある男性にどのように話しかけるか、観察してみればよい。涙にぬれた目、声の調子、口に出す言葉などすべてが間違いなく、この哀れな男が回復できないと見放している。しかし、男はこの女性に怒ろうとはしない。自分の病気だけでなく、他人からのこの哀れみも辛抱しているからだ。ずっとそうだったのだ。すべて

の人が彼のもとを訪れて、少しばかりの多めの悲しみを注ぎ出す。誰もがやってきて口に出す決まり文句は、『君のこんな姿を見て、胸が張り裂けそうだ』である²⁸⁾。

他人を哀れむことは、当人に悲しみを降り注ぐことであり、悲しみの感染に他ならない。情念にとらわれた人が、自分を攻撃するつもりでも、知らず知らずに他人を攻撃しているという現象を首肯できる。ただし、困惑する他者を哀れみ、何かを成し遂げたいという気持ちまで否定されることに対して抵抗が生まれる。

しかし、アランは徹底して利他主義や自己犠牲の考え方を排除している。他人のために自分を犠牲にすることや他者の利益のために生きる、と主張する人々は、自分の問題から生じた「悲しみの捨て場所」を、自分以外のところに求めているのではないだろうか。

「モラリストは意地悪なだけである」と断罪するアランは、多くの道徳家や「良い人」は、自分の不幸を無意識に他人に押し付け、あるいは、そういう他人をつくり上げていると論じている。『幸福論』60の「他人の不幸をつくりあげる」において、アランは次のような寓話の説明を試みている。

「荷車に乗せられて、断頭台に行き、処刑される人は哀れである。しかし、彼が処刑以外のことを考えているなら、おそらくいまの私より悲しくはないだろう。道の曲がり角や馬車の動揺のことだのを数えることにするなら、頭のなかにあるのは曲がり角や動揺のことばかりだ。通りに看板が見えて、そこに書かれている文字を読み取ろうとするなら、処刑される瞬間にもその文字が関心を奪っているかもしれない。しかし私たちはそんな風景を見ているわけでもないし、当人も気づきはすまい²⁹⁾。

断頭台に向かう罪人の心情について、我々は自分と重ね合わせて、哀れみの気持ちを抱く。しかし、咎人自身がそのとき真に何を考えているのかは、本人にしかわからない。私たちが彼に感じる不幸と彼自身が感じている不幸とは、まったく異なる可能性もあるのである。

しかしアランはここで、哀れみや同情を退けるために他人に対して冷酷かつ無関心で良いといっているのではない。悲しむことで悲しみを感染させ、それを増大させてしまうのではなく、「生命の力」を語らなければならないのである。『幸福論』の58「哀れみについて」からも明らかである。

「すべての生き物は、人生に勝利することを信じている。さもなければ、その場で死んでしまうだろう。この生命の力が、ただちに、哀れんで、病んできた人物を忘れさせるだろう。病人に与えてあげなくてはならないの

はまさにこの生命力なのである。実際に、哀れみなどあまりかけるべきではない³⁰⁾。

同情や哀れみといった、情念に突き動かされることは、愚かである。むしろ我々は、本質的な自然の働きである「いのちの働き」に従うべきである。それによって自ずと希望や快活さ、信頼などの明るい方へ導かれていく。ここで注目すべき点は「人に本当に与えられるものは、自分の持っている希望だけだ」である。他者を懇切に扱うには、まず自己を創造し、自分が幸福にならなければならない。そうして初めて彼自身の言葉で、「楽しい友情」と呼ぶものが可能になる。この現象についてアランは『幸福論』77「友情」で、次のように論じている。

「友情のなかにはすばらしい喜びがある。喜びが他の人にも広がることは、苦もなく理解できるだろう³¹⁾。

アランは、この「友情」に「礼儀」という名を与えた。他人に礼儀を尽すということが『幸福論』の核心である。

「礼儀」とは何かについて、アランは『幸福論』の84「喜ばせる」で、次のように述べている。

「群衆のなかで少しくらい突き飛ばされても、笑い飛ばせるようになる。笑えば押し合いへし合いもすぐに解消していく。誰もがかつてちょっとしたことで怒ってしまつて、ばつが悪い思いをした経験があるからだ。これであなただは逆上（小さな病気だ）したりすることはなくなるだろう。私は礼儀というものを、情念をなだめるための一種の体操だ、と考えている³²⁾。

礼儀とは、情念に操られた無作法な振る舞いを止めることである。さらに、それを「笑い飛ばせる」ことが、一つの礼儀の形を実践することとなる。ここで留意すべきは、無作法が情念による自分との闘いである限り、礼儀は単に他人への態度ではなく、自分への態度ともなりうる。アランは、『幸福論』の82「礼儀」で、この現象を論じている。

「礼儀知らずの人間は、ひとりでもやはり無作法である。ほんの少し体を動かすときもあまりに力み過ぎている。情念にがんじがらめになっていて、自分を恐れて臆病になっている³³⁾。

自分におびえ、過剰に力が入ってしまう以上、自己との関わり方の中にも、すでに礼儀の問題は含まれている。そして、『幸福論』の83「処世術」において、次のようにも述べている。

「礼儀正しさとは、習慣であり、身についた物腰である³⁴⁾。

では、その礼儀は、如何にして身につけるべきなのか。アランは「礼儀は習得されるものである」と明言した。

どのように習得するののかという、ダンスをするように習得する、という。『幸福論』82「礼儀」において、その秘訣を挙げている。

「礼儀作法というものは、ダンスを学ぶのに似ている。踊り方を知らない人は、難しい部分はダンスの規則を学んで、真似して動かせばいいと考える。ところが、これはダンスのうわべを覗いているにすぎない。ダンスには、まず柔軟さやなめらかさを身につける必要があるのだ。礼儀の規則を学ぶだけでは、同じようにうわべだけのものになってしまう。規則に従うだけなら、礼儀の入り口に立っているにすぎないのだ。大切なのは的確でしなやかな動きを身につけることである。硬くなったり、身震いしたりするようではいけない。ほんのわずかな不安でも、すぐに相手には伝わってしまうものだ」³⁵⁾。

ダンスを踊る際に、教本通りでは動きが堅苦しくなり相手との息も合わない。他者への礼儀も同様に、相手に不安を与えないために、学んで身につけるものである。アランは、『幸福論』の83「処世術」でも、こう例示している。

「優雅さとは誰にも不安を与えず傷つけもしない。言動が洗練された態度のことである」³⁶⁾。

これまで、「礼儀」について、理屈だけ聞くと、非常に難解なもの、繊細なものと思われるかもしれない。しかし難しく考えなくとも、自分が「上機嫌」でいることこそ重要であるということを、アランは『幸福論』の80「新年おめでとう」で述べている。

「あなたが上機嫌であることをお祈りする。この祈りこそが、贈り、贈られることでもっとも大切にすべきことなのだ。これこそ世の中のすべての人、そしてなにより最初に贈り主の心を豊かにする真の礼儀なのである。これこそ礼儀のやり取りで、増えていく宝にほかならない」³⁷⁾。

さらに、こうも付け加えている。

「親切な言葉、感謝の言葉を述べなさい。感じの悪い人にも親切に接しなさい。一度この上機嫌の波に乗っていったなら、あなたはどこまでも喜びを振りまいていける。注文を聞くときも、ウェイターはそれまでと違った親切な声で尋ねてくるだろう。店内のお客の様子も明るくなっていく。上機嫌の波はあなたの周囲に広がっていき、あなたを含め、すべてを快適にしてくれる。この波はどこまでも広がっていくことだろう」³⁸⁾。

礼儀を習得することこそが、自己を創造することであり、「情念の循環としての自分」を振り返らないことなのである。自己も他者も、すでに与えられた者ではなく、

「自己がつくり出されるとともに、他者がつくり出されるのだ」とアランは説いた。『幸福論』の36「私生活について」で、こう述べている。

「しかし、私に言わせれば果物でさえも、さらにおいしく味わえる工夫ができるようになる。しかし、結婚や人間関係全般にとってはなおさらそれが当てはまる。それはただ味わうというのではなく、作り出さなくてはならないのだ。社会とは、天気や風向きに従って、気分がよくもなれば、悪くもなる。木陰のようなものとはわけが違う。それとは逆に、いわば魔法使いが雨を降らせたり、天気にしたりするような奇跡の場所なのだ」³⁹⁾。

「奇跡」を自在に起こすためには「礼儀」が不可欠である。アランは、あくまで自分自身の意志と行動の中に、世界に対する解決策を見出したのである。

5. おわりに — 幸福になることは義務 —

アランは、宗教に対して批判的であったが、宗教的「儀式」の意義をある程度認め、『幸福論』の61「死者の崇拜」で、こう語っている。

「しかし、儀式は目的ではなく、あくまで手段にすぎない。だから、ほかの人たちがミサを聞いたり、祈禱を唱えたりするように、死者を訪れるべきではない。

死者は死んではいない。それははっきりしている。なぜなら私たちは生きているからだ。死者は考えているし、行動している。忠告したり、願望を抱いたり、承認したり、批判したりもできるのだ。これは紛れもない事実である。しかし声を聞くためには耳を傾けなくてはいけない。森羅万象が私たちの心のなかに存在しており、すべてのものが私たちの内部に、活発に息づいているのである」⁴⁰⁾。

アランがいたいのは、「儀式は手段にすぎず、重要なことは、死者が私たちの中に生きている」ということである。同じプロボの別の箇所でも、アランは「墓はわれわれを生のほうへと送り返してくれる」⁴¹⁾ともいっている。

では、「墓」とは何であろうか。「死者たちの場所」ではあるとともに、「私たちを取り巻く全体」ととらえることもできる。

アランは、『幸福論』の93「幸福への誓い」においては、次のように説明されている。

「現実によく考えてみると、子どもの喧嘩には上機嫌の要素は微塵もない。正確に言えば、よい情念など一つもないということである。そして、すべての幸福は意志と自己抑制から生まれてくるということだ」⁴²⁾。

「上機嫌」などは存在しない、ここに記されている。人間が情念から離れられない以上、不機嫌でいることはたやすく、不幸にもなりやすい。だからこそ、そうした自分という脆弱性を克服するために、自らの意志で上機嫌にする努力を止めてはならないのである。

この前章 92 の「幸福にする義務」には、次のように明記している。

「幸せになるのはいつも難しく、そのためには多くの人や出来事と戦い続けなくてはならない。しかも必ず勝てるわけではないのだ。まだストア派の入門段階の人なら、打ち勝つことのできない障害や不幸もあるに間違いない。しかし私たちにとっての最大の義務は、中途半端な努力で、敗北を認めてはいけないうことだ。とりわけ、私にとって絶対の指針としているのは、進んで幸福になりたいという心構えがなければ、幸福にはなれないということだ。だから、自分が幸福になるという意志を抱き、幸福をつくりだしていかねばならない」⁴³⁾。

ここで「義務」は、自己が自己に向けて発している、自己が自己に向けて課す義務となる。

これが、最優先となる「幸福になることの義務」である。同時に、先述の「私たちは他人の幸福を考えねばならない」という点にも言及しておかねばならない。

アランのいう「他人の幸福」が、他人に幸福を与えることを意味するとともに、そのためにはまず、自分が幸福にならなければならない。その上で、如何にして他人に幸福を与えるのか。『幸福論』の 89「幸福は美德である」において、アランは独特の論法を展開している。

「実際、自分の力を十分に発揮できてこそ、他人からも幸福をしっかり受け取れるようになり、一層幸せになっていけるのである。幸せな人は、交渉が巧みで、自分が与えたものを他者と頻りに交換していく。しかしやはり、人に幸福を与えるためには、自分の心も充実してなくてはならない」⁴⁴⁾。

ここでは、「交換」によって自分も他者も幸福を得ると義務づけしている。特に注目すべきは、「交換」といった経済的な語彙が恣意的に使用されている点である。『幸福論』87「勝利」では、次のように述べられている。

「幸福とは、見返りを求めなかった人に戻ってくるご褒美なのである」⁴⁵⁾。

さらに、愛されるということは、幸福な人に与えられる当然の報酬であると『幸福論』92「幸福にする義務」で説明されている。

「強調しておかなくてはならないのは、私たちは他人に対しても自分を幸福にする義務があることだ。幸福な

人でなければ愛されないという言葉をよく耳にするが、それはまさしく至言だ。しかし愛されることが、幸福な人に与えられる当然の報酬であることは、忘れられている。なぜなら不幸、退屈、絶望は、私たち全員が息をする空気のなかに存在しているからだ。私たちはこのような汚れた雰囲気を通して、前向きな見本を見せてあげ、社会を浄化してくれる人には感謝と戦士の栄冠を与えなくてははいけない。幸せになることを誓うことほど、重要なものはない。愛する人の退屈、寂しさ、不幸をなかなか消してしまえないのはなぜだろう。すべての男女にいつも忘れずにいてほしいのは、幸福、とくに自分が手に入れる幸福が、もっとも気前のいい贈り物であるということだ。幸福になることを決意した人に褒美を与えるため、名誉のしるしの月桂冠を授与してはどうかとまで考えている」⁴⁶⁾。

ここでは、幸福は自分だけでなく、他人に対しても義務であると論じた点は特記されよう。自分が幸福であることが、他人や社会への贈り物になるのである。いい換えれば、幸福とは自分だけでなく、まわりの人のためにもなる。それゆえ、周囲の人のためにも、まず自分が幸福にならなければならないのである。

そして、『幸福論』の末尾に置かれているプロポは、93「幸福への誓い」では次のように定義を加えている。

「だから、礼儀が政治にとって大切な規則になるのだ。礼儀と政治家とは関係した言葉で、礼儀正しい人とは、政治家のことをいうのである」⁴⁷⁾。

アランが生まれた 19 世紀末のフランスは、政治的に不安定な時代であった。18 世紀末のフランス革命によって、絶対王政が終焉を迎え、第一共和政が布かれたものの、君主制と共和制との狭間にあった。

「ここでははっきり言えるのは、自分に楽観主義になるという誓いを立てることである。最初はどんなに変だと思われても、幸福になる誓いを立ててはいけないう」⁴⁸⁾。

幸福は与えられるではなく、自分の意志によって作り出すものである。人間が市民社会で生きていく以上、この宣誓は必須なのである。

最後に、21 世紀を生きる我々がアランの『幸福論』を、如何に生かすことができるかという同時代的意義について考えておきたい。アランは、『幸福論』冒頭の献辞で、「本物の不幸については、私は何も書いていない」と記していた。つまり、病気や事故で死が迫っていたり、どうしようもない損害を被ったり、回避できない重大な不幸については、『幸福論』では述べられていない。

このことに関し、「アランは深刻な不幸を考えるべきであった」という見方もあるだろうが、アランはそれを承知の上で、あえて本物の不幸を取り上げなかった。つまり、自ら自己を不幸だと思い、他者を不幸に思い、不幸を感染させ増大させていく人々こそが、「本物の不幸」を拡大させる原因を創造している、とアランは考えたのではないだろうか。

現代の日本において、東日本大震災とそれ以後に続発している自然災害は、紛れもなく「本物の不幸」である。その一方で情念の循環にあり、己を不幸と思い込み、自死に至る人が年間2万人以上もいる。こうした閉塞感を打破する清涼剤として、アランの『幸福論』は存在するのである。

アランの言葉は平易でわかり易い。例えば、『幸福論』19「あくび」にある「神経症と呼ばれる病気では、あくびはいつも良い徴候であることを誰もが観察できる」⁴⁹⁾これは、ごく日常的な忠告である。それゆえ、軽薄だと見なされることがある。

しかし、小林秀雄の論考⁵⁰⁾を援用するまでもなく、これまで見てきたように、日常に即したわかり易いアランの言葉の中には、深遠で強靱な哲学的な思想の裏付けがあるのだ。

長谷川宏によると、アランは「日常茶飯の出来事から出発」⁵¹⁾しているという。アランの『幸福論』は、あらゆる日常生活の場面において、人々が陥り易い不幸の罍を抜け目なく指摘しているという点で、非常なる現代的意義を有しているといえよう。

参考文献

- 1) 『幸福論』からの引用は、次により頁数を記す。
アラン；幸福論，p. 270，住友進訳（日本能率協会マネジメントセンター，2017）
- 2) 合田正人；心と身体に響く，アランの幸福論，pp. 1-46（宝島社，2012）
- 3) スピノザ；エチカ（下），p. 136，畠山尚志訳，（岩波文庫，1961）
- 4) 幸福論，p. 309
- 5) 同前，p. 311
- 6) 同前，p. 24
- 7) 同前，p. 317
- 8) 同前，p. 320
- 9) 同前，p. 28
- 10) 同前，pp. 28-29
- 11) 同前，p. 30

- 12) 同前，p. 77
- 13) 同前，p. 191
- 14) 同前，p. 54
- 15) 同前，p. 74
- 16) 同前，p. 37
- 17) 同前，pp. 79-80
- 18) 同前，p. 320
- 19) 同前，p. 310
- 20) 同前，p. 176
- 21) 同前，p. 174
- 22) 同前，p. 302
- 23) 同前，p. 246
- 24) 同前，p. 174
- 25) アンドレ・モーロワ；アラン，pp. 144-145，佐貫健訳（みすず書房，1964）
- 26) 幸福論，p. 88
- 27) 同前，p. 280-281
- 28) 同前，p. 208
- 29) 同前，p. 215
- 30) 同前，p. 209
- 31) 同前，p. 269
- 32) 同前，p. 294
- 33) 同前，p. 287
- 34) 同前，p. 290
- 35) 同前，pp. 285-286
- 36) 同前，p. 291
- 37) 同前，pp. 279-280
- 38) 同前，p. 281
- 39) 同前，p. 137
- 40) 同前，p. 217
- 41) 同前，p. 219
- 42) 同前，pp. 320-321
- 43) 同前，p. 318
- 44) 同前，p. 308
- 45) 同前，p. 303
- 46) 同前，p. 318-319
- 47) 同前，p. 321
- 48) 同前，p. 322
- 49) 同前，p. 87
- 50) 小林秀雄は「アランの事」と題する評論において、次のように述べている。

「アランの文章は難解です。字句は簡明で、偉さうな専門語なぞどこにもありませんが（これはベルグソンも同様です）一句々々が決して明瞭な概念を現してはおり

ません。(中略)アランの豊かな模糊とした文体を楽しんだ後には、まことに透明、一点の雲もなく、澄み渡った空の様なものを僕は感じます」。

小林秀雄;アランの事, p. 73, 小林秀雄全集第三卷 私小説論 所収(新潮社、2001年)
51) 長谷川宏;幸福とは何か, p. 227 (中公新書, 2018)